

緒 言

紀要編集委員会

本学紀要第83号では、私たちが現在さらされている新型コロナウイルスについて「新型コロナウイルス禍を生きる」のタイトルで8名の先生方に、執筆をお願いし、それぞれのお立場からの寄稿をいただきました。その中では、本学の理念であるキリスト教の立場からの捉え方、対策会議の方針の経緯と対処、社会的影響、教員としての対処の仕方、明治期における感染症の歴史、健康維持の立場からの見解、教員として、また実践者としての対処の経験など、実に多様な論が寄せられた。それらはひとつひとつ体験と実践を踏まえた論考であり、まことに読み応えのある特集となりました。

ポストコロナ、ウィズコロナなどという言葉が喧しいが、まだ私たちは確実にコロナ禍の中にあり、終息など全く見えない状況下にあります。今、私たちにできる、あるいはやるべきことは、今回の特集に表明された知見を、どのようにそれぞれの活動に生かしていくべきかを、腰を据えて考えていくことでしょう。時宜を得た興味深い特集となったことを、筆者の皆様にあらためて御礼を申し上げるとともに、ぜひ一人でも多くの読者にお読みいただければ幸いです。

コロナ禍とキリスト教

尚綱学院宗教主任 田 所 義 郎

聖書における感染症

聖書においても感染症についての話題が多く納められている。旧約聖書では、各症状に対する対処法が示され、祭司は当時、患者の症状を見て、罹患や完治の判断をする役割も担っていた。そして、特に病人には身を清めることと隔離されることが求められた。手の洗い方については、まだウイルスなどの存在が知られていない時代に、現在私たちに奨励されているものとあまり変わらない方法が教えられていることに驚かされる。

また、隔離することも重要な要素の一つであった。いくつかの旧約聖書の物語によると隔離の先に救い（新しい世界、生活）が与えられるという定式が見られる。例えばノアの箱舟では、ノアとその家族が40日40夜の雨を箱舟の中で隔離され、洪水から救われる。また、出エジプトの物語においてイスラエルの民は40年の荒野での隔離生活を経て約束の地へと導かれる。ヨーロッパの言語において隔離（フランス語“quarantaine”など）を意味する言葉は、この40という言葉に由来があるのもこの思想から来ているとされる。

また、新約聖書では、ハンセン病が人々に恐れられていた様子がたびたび描かれている。しかし、イエスは旧約聖書の病人の隔離や身を清めることではなく、社会から疎外された患者にこそ関心を示すという変革を起こし、それらの人々のもとに出かけて行き、相手に触れ、癒しを行った（マタイによる福音書8章1～4節）。このことからキリスト教では感染症は恐れ